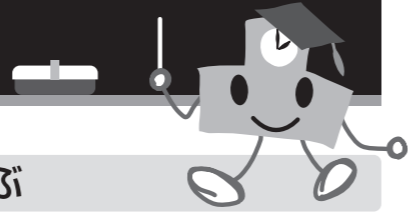


小学校の事例 南区 藤の沢小学校

伐採、植樹、育樹の流れの体験し、自然の大きなサイクルを学習。

身近にある自然「小鳥の村」を利用し、生き物の大切さを学ぶ。NPOの協力で学年ごとに作業を分担し、伐採から植樹を体験。自然のすばらしさや不思議から環境を考えるように。



はじめ 徒歩3分の学校林「小鳥の村」で学ぶ

本校では、学校から徒歩3分の場所にある「小鳥の村」という自然林を活用して、自然に親しみ、理解を深める活動を行っている。毎年5月には全国の愛鳥週間にあわせて「愛鳥祭」を開催。各学級が鳥をテーマに一年の目標を発表したり、愛鳥標語を小鳥の村に掲げるなどの取組を行ってきた。

愛鳥祭50周年を迎えた平成19年からは、石狩支庁水産林務部やNPO法人の協力により、「小鳥の村」での「げんきの森づくり」に、授業の一環として取り組むようになった。「げんきの森づくり」は、北海道が推進する森の学校推進事業で、子供たちが自由に遊んだり学んだりできる森を作るための活動である。



「小鳥の村」地図

内容 「樹木博士認定」や植樹 動物の観察も

生活科や総合的な学習の時間を利用して、各学年が年間を通して「小鳥の村」での観察活動を行っている。季節ごとの植物の移り変わりとともに、シジュウカラやヤマガラなど多数の野鳥、リス、キアゲハやカラスアゲハなどの昆虫も姿を見せる。6年生は卒業制作で巣箱を製作し、授業の中で鳥の生態を調べ、鳥が巣作りしやすいような樹や枝を選んで巣箱を設置している。

また、NPOの協力で、クイズ形式の試験で段位がもらえる「樹木博士認定」や、異学年のグループでのオリエンテーリング「小鳥の村大ぼうけん」なども実施。スノーシューの寄贈により、冬期間の森の観察や森林遊びも可能となった。



野草パネルと巣箱の展示

「小鳥の村」での「げんきの森づくり」は、植樹の下準備をNPOと一緒に5年生が行った。まずNPOに木がよく育つように植樹予定地の周辺を間伐してもらい、その後まわりの枝払い、苗木を植える際に邪魔になる草や笹を刈るなど「地ごしらえ」を行った。

そして整った場所に2年生が植樹を行うという流れで作業を行っている。取組から4年目となる平成22年には、アカエゾマツとエゾヤマザクラなど約60本を植樹し、延べ300本ほどの植樹となった。

今後 樹への感謝の心から 環境全体へ

動植物の観察を行うことで、鳥の名前や種類を覚えたり、新しい植物を見つけるときの興味へとつながり、児童の自然や環境への関心が高まっている。

植樹は、日当たりや成長の度合いを考えながら行う間伐からの流れを体験的に学習することで、伐採と育樹の関係を理解する機会となっている。このことが、自然の大きなサイクルを知り、知識に基づいた環境行動の大切さへの気付きを促すことにもつながっている。また、鎌の使い方を覚え、自分たちが実際に森で作業する体験を通じ、自分たちの地域を身近なところからきれいに、大事にしていこうという意識も生まれている。

さらに、観察と並行的に植樹活動を行うことにより、児童は「樹を増やすことは、人間にも動物にも優しい」と深く認識できるようになった。

今年度は地ごしらえの際にツリークライミングを実施したが、遊んだ後は落ち葉を樹の根元に戻し、樹に「ありがとう」と声をかける指導を行った。こういった体験を通じて、自然への感謝の念、さらには広く環境全体を大切にしている心が育まれている。

今後は、3～4年生も積極的に参加できるプログラムづくりなどを行い、この活動を発展的に継続させていきたいと考えている。



「地ごしらえ」のあとに苗木を設置



植樹の様子

広げよう
つなげよう
環境学習の輪



実施校から
メッセージ

本校はリュージュのオリンピック選手を何人も輩出しており、連盟にも多数の本校出身者がいることから、リュージュの体験学習を行っています。競技を行うためには、雪や寒さが不可欠です。こういったことから、子供たちは温暖化防止の重要性を学んでいます。